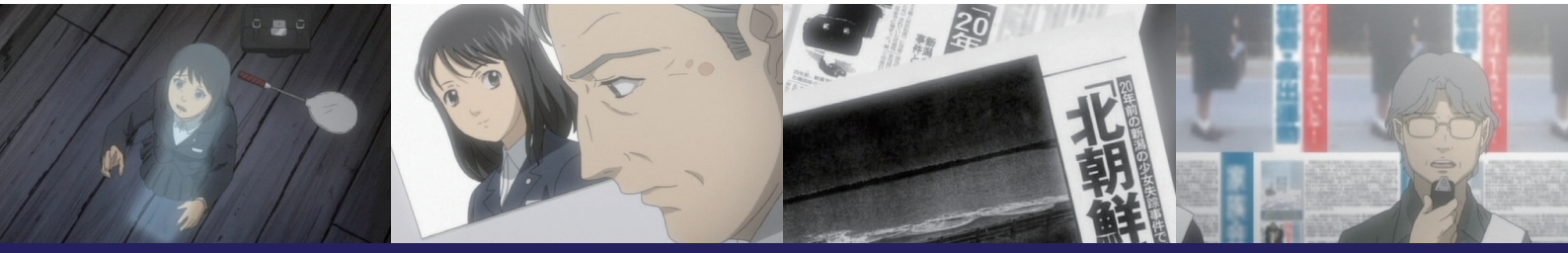
１日も早い拉致被害者全員の救出にむけて！

北朝鮮人権侵害問題啓発週間
作文コンクール2019

入賞作品集

主催：政府拉致問題対策本部
後援：文部科学省、法務省、外務省



１日も早い拉致被害者全員の救出にむけて！

北朝鮮人権侵害問題啓発週間
作文コンクール2019

入賞作品集

主催：政府拉致問題対策本部

後援：文部科学省、法務省、外務省

北朝鮮による拉致問題は、我が国の主権及び国民の生命と安全に関わる重大な問題であり、日本政府は、全ての拉致被害者の帰国を実現すべく、政府の総力を挙げて最大限の努力を続けております。

同時に、拉致問題の解決には、日本国民が心を一つにして、全ての拉致被害者の1日も早い帰国実現への強い意志を示すことが重要です。政府としては、拉致問題に関する啓発活動にも力を入れて取り組んでおります。特に、これまで拉致問題について触れる機会の少なかった若い世代への啓発が重要な課題となっています。

かかる観点から、政府拉致問題対策本部では全国の中高生を対象に、拉致問題関連の映像作品、舞台劇の視聴や拉致問題関連書籍の読書等を通じて拉致問題を知ってもらい、拉致被害者や拉致被害者御家族の心情を理解するとともに、拉致問題解決のために自分に何が出来るのか、何をすべきかについて深く考える機会としていただくことを目的として、北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール２０１９を実施いたしました。

本年度は最優秀賞、優秀賞の受賞者に拉致現場を視察いただき、12月14日に行われた表彰式では最優秀賞受賞者の2名から視察時の感想を発表していただきました。

この度、応募された４０５４作品の中から、入賞作品を文集にしましたので、是非、御一読いただけますと幸甚です。

令和２年１月

政府拉致問題対策本部

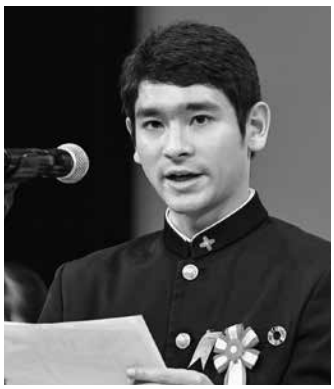
作品総数　4,054作品

中学生部門　2,521作品

高校生部門　1,533作品

【最終審査委員】

○北朝鮮による拉致被害者家族連絡会	横田 拓也 事務局長
○毎日新聞社	松田 喬和 客員編集委員
○内閣官房拉致問題対策本部事務局	岡本　宰 内閣審議官
○文部科学省	蝦名 喜之 大臣官房審議官
○法務省	山内 由光 大臣官房審議官
○外務省	田村 政美 アジア大洋州局参事官



表彰式の模様（2019 年 12 月 14 日、東京都千代田区　イイノホール）

目次

中学生部門

最優秀賞　拉致問題から考える私達の未来　船戸海帆　岐阜市立長良中学校3年　……6
優秀賞　全ての人の自由と幸せのために　島崎友貴乃　仙台市立五橋中学校3年　……7
拉致問題に向けて今できること　横溝麻志穂　仙台市立吉成中学校3年　……8
特別賞　私たちができること　田崎心寧　秋田県 能代市立東雲中学校2年　……9
忘れることは、解決ではない　山田陽菜乃　長野県 屋代高等学校附属中学校3年　……10
拉致の怖さ　後藤沙羅　名古屋市立今池中学校3年　……11
北朝鮮による日本人拉致問題について　藤田陸杜　札幌市立明園中学校1年　……12
笑顔になれる日を信じて　柿崎愛依　東京都 共栄学園中学校1年　……13

高校生部門

最優秀賞　今こそ「考動」のとき　長澤パティ明寿　山形県立山形東高等学校3年　……16
優秀賞　願うだけではなく行動へ　山口凜華　愛媛県立今治北高等学校1年　……17
時代の忘れ物　関山陽人　千葉県 敬愛学園高等学校2年　……18
特別賞　私たちに何ができるか　阪本ゆい　京都府 京都女子高等学校1年　……19
拉致問題について深く考える　邊見夢海　福島県立会津農林高等学校1年　……20
拉致問題解決のためにできること　菅野穂乃果　福島県立会津農林高等学校1年　……21
ふるさとの風にのせて　森本梢楽　徳島県立富岡東高等学校3年　……22
拉致問題の早期解決に向けて　西村菜々子　静岡県 浜松啓陽高等学校1年　……23

中学生部門

最優秀賞

拉致問題から考える私達の未来

岐阜市立長良中学校3年　船戸海帆

私は、北朝鮮による日本人拉致問題について調べ、衝撃を受けました。特に横田めぐみさんが拉致されたのが、私と同じ中学生の時だったと知り、もし私がめぐみさんの立場だったら、これから何をされるか分からないという恐怖や、もう二度と家族や友達に会えないかもしれないという不安でいっぱいになったと思います。また、めぐみさんのご家族や、他の拉致被害者のご家族の方々は、突然かけがえのない幸せを奪われ、悲しみに明け暮れていたのではないかと思います。

それでも、めぐみさんの無事を信じて何年も活動されてきたご両親に、北朝鮮からめぐみさんが死亡したという報告があっても、受け入れられるわけがないと思いました。勝手な理由で拉致した人を、そんなに簡単に死んだ事にしていいはずがありません。加えて、めぐみさんの遺骨として届いたのが、本人のものではなかったという事実を知り、私は強い怒りを覚えました。人の命を軽く扱いすぎています。拉致被害者のご家族の気持ちを考えれば、このような人をバカにするような行動は絶対にできないと思います。

しかし、人の命や死、人権について深く考えていないのは、今の中学生にも共通していると思います。学校生活の中で、心ない言葉や不快に感じる言葉を時々耳にします。そんな言葉を言う人は、自分の発言で相手を傷つけることができてしまう事、その言葉がもつ意味などをよく理解して、言葉の使い方を考え直すべきだと思います。でもそれだけでなく、それを聞いた人が、その言葉を本気にせずに、聞き流していることも改めるべき点だと思います。人を傷つける心ない言葉が、誰からも注意されない事で、軽々しく使える言葉になってしまうのは問題です。だから、もう一度全員で人権について考える機会が必要だと思います。

そのために私は、北朝鮮による日本人拉致問題を始めとする、人権を侵害するような出来事を調べて、広めていきたいと思います。きっと過去にあった様々な人権問題を知っている中学生は、あまり多くありません。なぜなら私達が生まれる前にあった事だったり、日常生活の中でそれらを知るきっかけが少ないからです。だから私は、これまでに起きた人権侵害問題をより多くの中学生に発信していきたいです。少しでもこの問題に関心をもてば、それぞれがもっと詳しく調べていくきっかけとなり、一人一人の人権について考える機会になると思います。現在でも女性に対する差別や、障がいのある人への偏見など、人権を侵害する問題は身近に起きています。でも、中学生の時に人権を大切にする意識を高めていれば、社会に出ても差別なんてしないと思います。差別や偏見のない、互いの人権を大切にし合う未来を私達が作りたいです。

優秀賞

全ての人の自由と幸せのために

仙台市立五橋中学校3年　島崎友貴乃

私が横田めぐみさんを知ったのは、小学四年生の頃だった。校内の掲示板に貼られたポスターに写った、着物姿の愛らしい少女の姿が印象に残り、母に尋ねた記憶がある。「外国に連れ去られ、今も帰れない。」そんな話を聞いたように思う。しかし、その少女と家族を襲った悲劇と、そこに記された「必ず取り戻す」という言葉に込められた思いを、当時の私は想像することすらできなかった。

今回、アニメ「めぐみ」を鑑賞し、めぐみさんと家族の身に起きた「拉致」という信じ難い事件のいきさつを知り、大きな衝撃を受けた。「拉致」、それは人間の尊厳を踏みにじる犯罪行為であり、同じ人間同士の間に決して起こってはならないことだ。他人の自由と幸せを奪って、何が成し遂げられるというのか。そのようなことをした人間たちに罪の意識はないのだろうか。自分で選ぶはずの未来、夢、家族や友人との絆、その全てを断ち切られ、見知らぬ土地へ連れ去られためぐみさんは何を思い、生きてきたのか。そして残された家族は、長い年月をどのような思いで過ごしてきたのだろうか。大切な家族を奪われた怒りと悲しみを、「必ず取り戻す」という強い意思に変えて、これまで闘ってきたであろう彼らの胸の内を思うと、何もできない自分に無力感が湧いてくる。しかし、その感情に流され、この問題から目を背けてはならない。私にできるのは、拉致問題について深く理解し、現在も続いている身近な問題として関心を持ち続けること、そして、想像力を持ち、被害者とその家族の思いに心を寄せることだ。小さな思いではあるが、それが国民の思いとして集まれば、問題解決へとつながる力にもなり得るはずだ。

アニメの中で、めぐみさんの母である早紀江さんが、街頭で人々に呼びかけている場面が印象に残っている。「私たちは北朝鮮に住む一般市民の人たちを憎んだり恨んだりしているわけではありません。」深い怒りと悲しみの中にあってもこのような言葉が言えるのは、罪もなく苦しめられることの理不尽さを、誰よりも知っているからだろう。早紀江さんの言葉を聞き、拉致を指令した人と北朝鮮の民衆とは別であり、国としての北朝鮮を憎むべきではないと感じた。また、拉致被害者の蓮池薫さんの著書には、厳しい管理体制や食料、経済難に苦しむ北朝鮮の人々の姿が綴られていた。そのような、私たちとは異なる社会環境で生きる人々へも想像力を広げ、対立ではなく、どこまでも対話によって理解し合えればと思うのは、理想論でしかないのだろうか。

国際社会において、全ての人権が尊重されるために、民族を越えて互いに歩みよる努力をし、真の友好関係を築くこと。そして、その願いの先には、必ず拉致問題の解決があると私は信じたい。

優秀賞　拉致問題に向けて今できること

仙台市立吉成中学校３年　横溝麻志穂

「拉致問題」と聞いて、日本のどれ程の人が知っているであろうか。私は昨年、全校道徳の授業で、アニメ「めぐみ」を観た。その時、子どもの権利条約カードを初めて手にした。そのカードには、子どもが安心して毎日を暮らすための国際条約が書かれていた。

当時十三歳だった横田めぐみさんは、下校途中、北朝鮮に拉致された。そして、めぐみさんの日常が急停止し、輝かしい未来までが突然、閉ざされた。「めぐみ」を観ている私にも、めぐみさんの恐怖感と深い悲しみが伝わり、胸が痛んだ。

私は以前から拉致問題について少しは知っていたが、「めぐみ」を観てから、一層拉致問題について深く知りたくなった。また、子どもの権利条約が、めぐみさんにも守られるべき権利だったのではないかと思え、いち早く拉致問題が解決してほしい気持ちが増した。

その後、私は拉致問題に関するテレビの番組や新聞記事に多く目を向けるようになった。

特に今年の二月にテレビで観た番組が印象的で心に残った。それは、拉致被害者とその家族が拉致を知らない若者たちと対談する番組だった。「突然、自分の家族がいなくなったらどうするか。」これは、拉致被害者とその家族が若者たちに質問した言葉だ。「探す」「警察に行く」「ＳＮＳで情報収集」と様々な意見が出た。私ならその三つとも選ぶ。愛する家族のために。家族がいる幸せは、当たり前のことではないのである。

さらにこの番組で、めぐみさんの母の横田早紀江さんが拉致問題の解決に向けて訴えていた。「娘が戻ってくるまで頑張り続ける。」早紀江さんの必死な思いが私の心を強く打った。拉致は、誰にでもありうることで、残された家族の苦悩を自分の立場に置き換えると、とても辛く感じるのである。

また、地方新聞で、拉致被害者とその家族の拉致問題の解決に向けた署名や募金活動、講演や集会が紹介された記事を読んだ。その活動に参加する大半が、いつも高齢の人ばかりだと分かった。それは拉致問題が四十年以上も前のことなので、若い世代は知らない人の方が多いからかもしれないと思った。

だから私は、拉致問題を風化させないように、今後も若い世代につなげていきたい。そのために、今できることを提案したい。まず、若い世代に拉致問題について広める。若い世代を対象に、拉致問題の解決に向けた集会を数多く開いたらどうだろうか。そこで拉致問題を学び、興味を持つ機会を増やす。また拉致被害者とその家族の活動の手助けをするために、若い世代のボランティアを募ることも必要だろう。

めぐみさん他拉致被害者の帰国を願い、国民が心を一つにして、拉致問題について意識を高め、解決につながることを切に願う。

特別賞

私たちができること

秋田県 能代市立東雲中学校２年　田崎心寧

「特定失踪者」

何度かテレビで耳にしてきた言葉ではあるが、これまでの私は特段興味があるわけではなかった。何となく聞き流していた。あのときまでは…。

昨年、私の学校で行われた拉致問題啓発講演会。そこで特定失踪者家族の藤田隆司さんが語ってくださった拉致の恐怖は、今でも忘れられない。

ある日突然、薬で意識をなくされたり、夜道などで急襲されたりして拉致され、見ず知らずの国に連れて行かれた人たち。その恐怖は計り知れない。被害者及び被害者家族のことを思うと胸が締め付けられる思いだった。

十七年前、五名の拉致被害者が帰国したものの、その後、大きな進展は見せていない拉致問題。特定失踪者家族会では、拉致問題の早期解決、拉致被害者全員の帰国を求めて、各地での署名運動や啓発講演活動を行っているという。

私の住んでいる能代市は日本海沿岸に位置している。数年前、北朝鮮の木造船が近くの海岸に漂着している。決して拉致問題とは無縁とは言えない。話を聞きながら、自分も何か解決のためにできることはないかと考え、拉致問題について調べてみた。

すると、平成四年、当時二十六歳の女性が能代市の海岸に車を残し行方不明となっていること、過去には北朝鮮工作員の遺体も見つかっていることを知った。さらに、秋田県は長い海岸線が北朝鮮工作員の侵入・脱出ポイントにもなっていたという。

「拉致」という言葉が一気に身近に迫ってきているようで恐ろしい思いに襲われた。

恐ろしくて目をそらしたい出来事であり、個人で解決を図るにはあまりにも大きすぎる問題である。しかし、本来あるはずだった人生が理不尽に失われた人たちがいる。自由を奪われ愛する家族にも会えない苦痛を味わっている人がいる。この事実を絶対に見逃すことはできない。

今、私ができること、それは、まずこの問題を深く理解すること、そして被害者の境遇を思い、被害者家族の気持ちに寄り添うことであると考えた。

近年、被害者家族の高齢化も叫ばれている。私たち若い世代が、数十年前に日本には北朝鮮に拉致された人がいたことを語り継ぎ、一人一人の交流の輪を、そして声を大きくしていくことが、国を動かす原動力になるはずである。

拉致は今なお続く人権侵害である。日本国民の一人として、心豊かで自由に生きる権利が保障される社会を創っていかなければならない。そういう責務を背負っているということを忘れずに過ごしていきたい。拉致問題の早期解決を祈りながら。

特別賞

忘れることは、解決ではない

長野県 屋代高等学校附属中学校3年 山田陽菜乃

知らなかった、のではなくて、〝知ろうとしていなかった〟。

アニメ「めぐみ」を見て、私は痛感した。ニュースやドキュメンタリーなどでよく目にする拉致問題であるが、過去の私を省みると如何に私がこの問題を他人事のように、薄く見ていたかが分かった。拉致問題について知っていたつもりだがあくまでそれは〝つもり〟であって、私は本当にしっかりとこの問題について考えたことは無かったのだ。

私にできることは何だろうかと考えてみた時、すぐには思い浮かばなかった。まだ中学生、一介の中三にすぎない私に、できることなどあるのだろうか、と。考えてはみたが、具体的なことは何も思いつかなかった。しかし、このように何かこの拉致問題について知り、理解を深めることは私にできることなのではないかと思う。一人の日本人として、――拉致被害者の方々と同じ日本人として、拉致問題を知り、きちんと問題として捉えることはひとつの責任ではないだろうか。

このようなことを考えた中で、ブルーリボン運動という拉致被害者の帰国の実現を目指す運動を知った。青いリボンの意味は海、そして青い空――同じ空の下、というものだ。アニメ「めぐみ」で横田さん夫妻が拉致被害者の帰国を求めているシーンが強く印象に残っているが、先日報道番組で、実際に横田さん夫人が拉致被害者の家族などの大集会で話しているのを見た。「私たちはただ、『頑張ったね』と声をかけてやるその一刻だけが欲しいのです」。胸には青いリボンが輝いていた。

今まで流すように見聞きしてきた拉致問題だったが、今回のように何か学んだ状態で聞くと今までとはわけが違った。これは知っておかねばならない、そして理解しなくてはならない。そう切に思う。

ちっぽけな私に、実際に拉致被害者の方々のためにできることはそう無い。私は政府の人間でも、拉致被害者の家族でもない。しかし、知って理解することはできる。過去の悲劇に背を向けず、真正面から受けとめ、そしてそれをきちんと重要視し、捉える。私にできることはこのぐらいだが、これは忘れ去られてはいけない問題だ。横田めぐみさんを始め、多くの拉致被害者の方々の一刻も早い帰国を目指し活動する方々に賛同し、協力できることをするのが、基本的人権の下自由を掲げる国の国民の責任とすべきことなのではないだろうか。時が経ち、忘れ去られたとしても、帰国の無い限りそれは解決とはならない、と私は深く思う。忘れることは、解決にはならないのだ。

特別賞

拉致の怖さ

名古屋市立今池中学校3年　後藤沙羅

アニメを見て最初の感想は、「怖い」だった。

ある日突然連れ去られ、暗い船室に閉じこめられ全く見知らぬ国につれてこられた自分を想像してみた。どうなってしまうのだろうか。もう家族や友人と会えないのだろうか。家には帰れるのだろうか。不安と恐怖で、パニックになるだろう。

一方、娘を連れ去られた横田さん夫婦はどうだろう。どこにいるのかも、いつ帰ってくるのかも、ましていなくなった理由すらも分からない娘を何年も待ちつづけるのは並大抵の苦しさではないと思う。

あんなにも愛情にあふれ、温かかった家庭の時間は、あの日から止まってしまった。

このように、個人とその家族の生活や未来、夢やすべての思いを完全に無視して、北朝鮮は、日本人を拉致し、自国のために働けと強要した。

それが今もなお解決しない。それは本当に恐ろしいことだと思った。

ところが、日本と北朝鮮が何度も話し合いを重ね、実際に帰国できた人たちもいた。

二〇〇二年十月十五日。拉致被害者五人が帰国した。この時点では一時帰国で被害者の子どもは帰ってこないということだった。この条件はおかしい。なぜやっと帰ってきた大切な家族をまたもどさなくてはいけないのだろう。なぜその子どもも一緒に帰ってきてくれないのだろう。家族は納得がいかず、必死に説得した。しかし、被害者は子を選ぶか、親を選ぶかという苦しい判断をしなくてはいけなくなってしまった。この判断は拉致問題をもっと深く受け止めて、一時帰国ではなく最初から永久帰国でその子どもも一緒に帰国できれば、しなくてよかった判断だったかもしれない。

国同士だけでなく、日本国内もこの問題を軽視していたのではないか。

アニメの中での署名を集めるシーンだ。苦しい訴えを他人事ととらえ立ち止まりすらしない人、耳にいれようともしない人の多さに私は衝撃を受けた。しかし、その姿が自分にも当てはまり目をそらしたくなる思いでもあった。

確かに社会には様々な考え方がある。それでも、考え方以前にこの問題について関心をもつことが大切だと思う。私自身も心がけたい。

人権とは、「人間が人間として生まれながらに持っている権利」と辞書に書いてある。人は一人ひとり生まれながらに、平等で、自由に生き、幸福を追求する権利を持っているはずである。拉致は、その権利を完全無視した行為だと思う。一日も早くこの問題が解決され、犯された人権が解消し、家族のあるべき姿に戻る日を願いたい。

特別賞

北朝鮮による日本人拉致問題について

札幌市立明園中学校1年　藤田陸杜

突然家族が消えてしまったら、自分はどうするだろう。もし自分が消えてしまったら、家族は自分をどこまで根気強く探してくれるだろうか。当たり前のように共に暮らせる家族、だけど決してそれが当たり前の家族が全てではない世の中で、家族そろって暮らせることに感謝しなければいけないと思う。

北朝鮮による日本人拉致問題を描いたアニメ「めぐみ」を視聴して、言葉でしか聞いたことのない日本人拉致を初めてどのようなものか知った。いつものように目が覚めて朝御飯を食べて我が子を見送る。しかし、それが我が子に会える最後の時だということなど誰が予想するだろうか。他国の誰かもわからない人に連れ去られ、どこかもわからない暗い部屋で泣き叫ぶ、この恐怖は拉致を体験してしまった人にしかわからないだろう。我が子が帰ってこない、朝元気に登校した子が帰ってこない。この時、親は何を想像するだろうか。もうこの国にすらいない我が子に何を求めるというのだろうか。今回のアニメに出て来る横田めぐみさん以外でも、まだ何人も拉致されている。この札幌を含む北海道でも拉致されたのではないかと言われる人物もいるのだと言う。

横田めぐみさんは、北朝鮮で「玉姫」（オッキ）と呼ばれ、北朝鮮の人に日本語を教えていたのだそうだ。北朝鮮が日本人を拉致する理由は、日本の情報や技術など、日本に直接聞けないことを強制的に探り出し、拉致して労働を課しているのではないかと思った。

小泉首相が日朝首脳会談をした時、北朝鮮側が日本人拉致について初めて認めた。その中で横田めぐみさんは死亡したと語られた。果たしてこれが真実か嘘かもわからない。この時、僕の母はこう思ったそうだ。「実際に拉致というものが本当にあったと知り、まるで映画のような出来事に驚愕した。この恐怖は計り知れない」と。

このように、拉致というものは本当なのか嘘なのかわからない情報にしがみ付き、解決の糸口を見つけなければいけないものだ。結局帰ってこない我が子、相手にもしてくれない政府、それでも諦めない親。当時の状況がどのようなものだったかはわからないが、政府としても人一人のために北朝鮮との友好が保たれなくなるかもしれないというのも仕方がない。しかし、そこで一般国民に何か手を差し伸ばせなかったのか、少しでも協力できなかったものなのか、アニメ「めぐみ」を視聴した限り、僕はそう思った。どこの国でも、他国の人を連れ去ることは決してしてはいけないことだ。他国に一人旅とは訳が違う。そして、この先北朝鮮に今もいるかもしれない拉致被害者が全員解放された上で、さらなる友好関係が築かれることを僕は願っている。

特別賞

笑顔になれる日を信じて

東京都　共栄学園中学校1年　柿崎愛依

「命以外、全てうばわれました。」という拉致被害者の蓮池薫さんの言葉に胸がいっぱいで涙が出て忘れられません。今年五月に学校で行われた蓮池薫さんの講演会で、その言葉の重み、深さ、そして拉致という未だに解決していない問題を知りました。

それを機会に拉致に関するニュースや話に耳をかたむけるようになり、横田めぐみさんのアニメ「めぐみ」を何度も見ました。見るたびに胸をしめつけられて涙が出ます。

今の私と同じ十三歳、中学一年生の時に、一九七七年十一月十五日に北朝鮮によって新潟県から拉致されてしまいました。「いってきます」と学校に向かったその日から四十二年がたちました。

「お父さんお母さん」「助けて助けて」と小さな船の中で何度叫んだことか、その時のめぐみさんの気持ちを思うとどれだけ苦しかったか、悲しかったか、言葉になりません。

めぐみさんの両親はたくさんの愛情で育てて普通の生活を送っていたのに、ある日突然めぐみさんも両親も自由も全てをうばわれました。ずっと一緒にいられると信じていたのに、家族をバラバラにして、こんなことをしていいはずがありません。決してゆるされない問題です。

きっとめぐみさんの両親は今も帰って来なかったあの日、あの時の十三歳のままのめぐみさんのままなのかなと思います。他の拉致被害者の方々も同じように当時のままであって、思い出も記憶もその時で止まってしまっているのではないでしょうか。

日本政府が認定している拉致被害者は十七名でそのうち五名帰国を果たしましたが、他の方々はまだ北朝鮮に残されたままです。

めぐみさんもみなさんも日本に帰れる日を信じて一生懸命に頑張っているはずです。私がめぐみさんの立場だったら、たえられるのか自信はないけど、大好きな家族に会うためにあきらめず必死に生き続けます。

一日も早く拉致被害者ひとりも残さず全員を日本に、そして家族のもとにかえしてほしいと思います。そして拉致問題が解決したらみんなが笑顔になれるのではないでしょうか。

今、私ができることを考え、家族会、救う会の署名運動に参加したり、各地で行われている拉致問題解決や風化させない取組などのイベントに積極的に参加したいと思います。

「いってきます。」と出かけためぐみさんが「ただいま。」と帰って来る日のために、私ができる事はしていきたいです。

一人の小さな力でも、集まれば大きな力になると思います。

みんなが笑顔になれる日を願い信じて。

高校生部門

最優秀賞

今こそ「考動」のとき

山形県立山形東高等学校3年　長澤パティ明寿

新聞に掲載された一枚の写真。そこには、山形県遊佐町に漂着した一隻の木造船が映し出されていた。大きく破損した船体にはハングルの文字。記事には北朝鮮から流れ着いた船だろうと記されていた。その数ヶ月前、アニメ「めぐみ」を視聴し、拉致問題を自分事として考え、北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクールに応募していた私にとって、読み流せる記事ではなかった。なぜなら、拉致問題について調べる過程で、北朝鮮工作員は小型船やゴムボートを使って拉致を実行したということを知ったからだ。ふと、「まさか…」という思いが頭をよぎった。

「私達はもうすでに忍耐の限界を過ぎています。」「もう本当に時間がないんです。」「会いたいんです。」拉致被害者ご家族ビデオメッセージの中で語られた悲痛の叫びだ。北朝鮮という国家主導で行われた理不尽な犯罪行為が四十年以上の間本人と家族の生活を歪めている。日本海の青い海が被害者と家族の人生、夢、希望を阻み続けている。拉致問題。それは時間が解決してくれるものではない国際的人権犯罪だ。被害者と家族の高齢化が進む中、一日も早い帰国へ向けて悠々と構えている時間はない。安倍総理は、「拉致問題解決に向けて条件をつけずに金正恩氏と直接向き合う。冷静な分析の上であらゆるチャンスを逃すことなく果敢に行動する。」と述べている。日本政府が強い決意で北朝鮮と対話していく。それを支えるのは私達一人一人の声に違いない。

ここに興味深い世論調査がある。平成三十年十月実施外交に関する世論調査。北朝鮮への関心事項という項目について日本人拉致問題を挙げた人の割合が八一・四％と最も高い結果であった。しかし年代別にみると、十八歳～二十九歳においては、ミサイル問題、核問題に続く七〇・四％と関心度が低い状況である。若者の声。若者の力。国内世論を盛り上げる上で、これからの日本・世界を担う私達の積極的参加は欠かせない。そしてそれを喚起し主体的に取り組める機会が何より重要だ。私はその具体案として北朝鮮による拉致問題を考える政府主催の全国中学生・高校生サミットの開催を提案する。サミットでは、「めぐみ」を視聴し、被害者のご家族の生の声をお聞きする。更に、参加者同士活発な意見交換を行い自分達に出来る事を模索する。この機会は拉致問題へのより深い理解・視点を持つことにつながるとともに参加者間のネットワーク構築に大きく資するはずだ。参加者が、そのネットワークを活かし、全国各地でメッセンジャーとして周りに発信し、関心の輪を広げるアクションを展開していく。その輪の広がりこそ拉致問題解決の推進力だ。

拉致被害者の方々が家族と再び手を取り合う日まで、一日本国民として積極的かつ主体的に「考動」し続ける。

優秀賞　願うだけではなく行動へ

愛媛県立今治北高等学校1年　山口凜華

「お父さん…お母さん…！」

埃くさい船内の荷物置き場。そこに、一人の少女。荒波を立てながら日本を離れる船。少女の意志など一つも聞かずに…。

彼女、横田めぐみさんが北朝鮮に拉致されたのは、もう四十四年も前のことだ。

私が生まれる何十年も前から、めぐみさんは日本にいない。私も物心がついてから現在に至るまで、何度も横田夫妻の会見を目にしてきた。そうは言っても、私には縁遠い話である、と心のどこかで思っていた。国と国との問題だ、と。しかしそれは大きな間違いだと気づいた。高校生になり改めて拉致問題について考えさせられる機会があった。アニメ「めぐみ」を観たのだ。

そこには、ごく一般の家庭があった。横田家は、愛に溢れていて、みんなが幸せに暮らしていた。しかしたった一瞬の、非情な「拉致」という行為が、めぐみさんを取り巻く多くの人の運命を変えてしまった…。私はインターネットで再度、横田夫妻の会見を見た。強い訴え、めぐみさんの写真、涙…。私の中で様々な想いが交錯した。横田夫妻は、どれだけ泣いただろう。苦しんだだろう。それでも立ち上がり、上を向くしかないと行動に移すまで、どれだけの時間がかかっただろうか？そして、めぐみさんも同じ、いやそれ以上に辛い想いをしている。被害者の十七名、家族の方々のために、拉致被害者に対する現状について理解を深め、自分達に出来ることを探そうではないか。

高校生の私に出来ることとは何だろう。まず一つ目は、拉致問題について知ってもらえるように身近な人に勧めることだ。インターネットで「政府インターネットテレビ　アニメ　めぐみ」と検索してみてほしい。拉致の惨さが伝わるはずだ。誰もが胸を締め付けられ、他人事とは思えなくなるだろう。更にそのホームページでは、動画への意見・感想を記入できる。次に二つ目は、この作文を書いたようにＳＮＳで発信することだ。私が世界へ呼びかけることで同調し、行動してくれる人を増やせるかもしれない。そして三つ目は金銭面で支援することだ。ブルーリボンバッジをご存知だろうか？一個五百円で購入でき支援金を送れるのだ。更にそのバッジをつけることで意志表示にもなる。私も通学鞄に早速つけている。ほら、出来ることは多くある。「知らない」じゃない。「機会がない」でもない。自分から近寄ろう！待っているだけでは叶わない。国民みんなで立ち上がるのだ。

「ただいま！」

めぐみさんの声が聞きたい。

優秀賞　時代の忘れもの

千葉県 敬愛学園高等学校２年　関山陽人

今年再度、アニメ映画「めぐみ」を見ました。昨年、やはりこの時期に映画「めぐみ」を見た時に私は自分の北朝鮮拉致問題に対する無知を思い知りました。そしてこんなにも被害者の方たちが悲しみ、そして苦しんでいるのにのうのうと生きている自分自身に憤りを感じたことを今でもはっきりと覚えています。しかし、今回私はこの気持ちを抑え、今、本当に私たちと政府が拉致問題を解決するためにすべきことを改めて考え直しました。

昨年、私も映画「めぐみ」を見る前は「拉致被害者の方たちはかわいそうだ。」という表面的で非常に浅い考えに終始していました。同じように、現代の日本の未成年、そして成人世代の拉致問題に対する意識が非常に低いように思えます。私は拉致問題だけではなく、この意識の低さも解決すべき問題だと考えます。そのため私は解決策は国内・国外それぞれに向けたものとして二つの方策がなくてはいけないと思っています。

一つ目に、私たち日本人が意識を改善するためには、学校の授業で拉致問題を取り扱うべきです。一例として、この映画「めぐみ」をクラスで視聴し、拉致が与えた残酷さや苦しみをみんなが認識し、それに対して、自分が素直に感じた思いを文に起こすことです。また、ディスカッションをクラスで行い、互いの意見の交換をするのも良いかと思います。こうすることにより、拉致問題の深い部分を知り、自分を含め互いに学び合うこともできます。また、社会人に向けては政府がツイッターなどのＳＮＳやユーチューブといった動画配信アプリに協力を呼びかけ、広く社会に届けることも良いのではないかと思います。

二つ目に、この問題を少数国間ではなく、多国間のものにするために、日本がリードすることが必要だと思います。今までは、アメリカに協力を要請し協力体制をとって解決の方向に進んでいるようにも思えましたが、私は内心少し決め手に欠けるのではないかと思っていました。そのためアメリカだけでなく、拉致被害にあったタイやフランスなどの十二ヶ国全てと協力体制を築くべきだと思います。被害にあった国々が声を上げ国際社会に訴えていくことで、関心がなく無関係だと思っていた国も関心を持ち協力をしてくれると私は思います。

私がこの問題で一番恐れているものは、日本人がこの問題に興味関心を無くし、拉致被害者や御家族の方たちが高齢化して時代の忘れもののようになってしまうことです。元号が平成から令和になった今こそ、私たち日本人がこの問題が風化されてしまうのを防ぎ、多くの国と協力をし、そしてリードすることが、この問題解決の糸口に必ずなると私は信じています。

特別賞

私たちに何ができるか

京都府　京都女子高等学校1年　阪本ゆい

多くの日本人が北朝鮮によって拉致されて行方不明となっている拉致問題。これは、拉致被害者だけでなく、社会全体で立ち向かっていかなければならない問題だ。

拉致被害者の家族の心情を理解するため、拉致された横田めぐみさんの母、早紀江さんが書いた本を読んだ。「あの日のことは思い出したくないのにその時の光景は鮮烈によみがえり心臓が締めつけられるように苦しい」と書かれた部分に衝撃をうけた。テレビで、拉致問題を強く訴える様子ばかり見てきたからだ。めぐみさんを失った底知れない悲しみがつたわってきた。拉致問題は、人の心の人生にこびりついて離れないものだ。そして、それをかかえたまま拉致問題の活動を続ける拉致被害者の家族を応援したい。

拉致被害者の家族は国交のない北朝鮮へのりこむこともできない。だから政府を頼らざるをえない。そして、拉致問題にしっかりと対応してくれる安定した政権が必要だ。そのためには私たちがもっと政治の仕組みや国際情勢を学び、理解するべきだ。学校や地域などで、社会に関する様々なことを教える機会をつくる。また、選挙に行くときに、誰に票を入れるのかをしっかり考えるようにする。そのような取り組みを行い、積極的な政治参加をする人々を増やしていきたい。

また、国際社会全体で、北朝鮮に圧力をかけていかなければならない。「理不尽なことをされ続けている北朝鮮に、きっぱり怒って下さい。」と早紀江さんは主張している。それは経済制裁であったり、言葉の圧力であったりと様々な形がある。めぐみさんを連れ去りついにはめぐみさんは自殺したと嘘をついた北朝鮮。言葉だけでは北朝鮮は動いてくれないのかもしれない。その場合は、国際社会全体で北朝鮮に経済制裁をかけていくべきだ。そして、私たち一人一人ができることは言葉の圧力だ。沢山の人が国境をこえて拉致問題を知り、多くの言葉の圧力を北朝鮮にぶつけていくべきだ。何より、拉致問題に関する活動が一時的なものではなく持続していってほしい。

特別賞

拉致問題について深く考える

福島県立会津農林高等学校1年　邊見夢海

私は国語の授業で見た「めぐみ」で初めて拉致問題について詳しく知りました。

それまではただニュースで聞いたことがある程度で深く考えたことはありませんでしたが、この「めぐみ」を通して今までなぜ深刻に考えてこなかったのだろうという考えに変わりました。突然どこかも分からない場所へと連れさられて行き先もみえない、会いたい人にも会うことができない拉致被害者、突然大切な家族を失い、その後の安否も分からずただ無事を信じて日々待ち続ける拉致被害者家族の心情。それはきっと計り知れないほど苦しくて悔しくて辛いものなのだと思います。現在警察が把握している拉致被害者は十七名、拉致の疑いのある失踪者は九百名にもおよびます。その現実を知った私は、残された家族の方々のためになにかしたい、と強く思い、インターネットで拉致被害者家族のためになにができるのか調べました。そこには私が今まで知らなかった様々な支援方法がありました。例えば、ブルーリボン運動や募金、街頭でのチラシ配り、インターネット上での拡散、テレビでの放送、北朝鮮との直接会談などです。そこで早速、私はインターネット上での拡散を実行してみました。すると、以前の私のように拉致問題について聞いたことがある程度で深刻に考えたことがない人が多いなと実感しました。

では、どうしたらこのような人達が減っていくのかというと、ひとりひとりが拉致問題について深く考える、関心を持つ、情報を広めるというわずかなことです。それでも多くの人が実行することによって世の中の拉致問題に対する考え方が変わり、拉致問題解決へとつながるのだと思います。

めぐみさんが拉致されてから早四十年経つ今でもめぐみさんのご両親は北朝鮮からめぐみさんを取り戻す運動を続けています。すくすくと成長していく娘を見守れなかった悔しさ、虚しさ、情けなさなど様々な感情があると思います。そんな感情を恵まれた環境にいる私たちが無視をして良いのでしょうか？もし自分が同じ立場だったとしたら、大切な家族の帰還を諦めることができるのでしょうか？そういったことを考えていくとまた、拉致問題に対しての考え方が変わっていくと思います。

私はこれから、拉致問題について今以上に身近な問題として考え、自分ができることを実行し生活していきたいです。拉致問題は信じたり祈ったりするだけでは解決へとつながらないと思います。やはり、ひとりひとりが身近なことから行動すること、それが解決への大きな鍵になると思います。

いつか拉致問題が解決する日のため、みんなが協力して拉致問題について取り組む世の中になったらいいなと思います。

特別賞

拉致問題解決のためにできること

福島県立会津農林高等学校1年　菅野穂乃果

授業の中で、映画「めぐみ」を視聴しました。視聴する前に私は、「拉致問題、まだ続いているの？」と思ってしまいました。拉致問題という言葉は中学校のころから知っていましたが、最近は耳にしていませんでした。日々新しい情報があふれる今日、この拉致問題は、おびただしい量の情報の中に埋もれつつあるのかもしれません。人命を脅かし人権を侵害する大きな問題であるはずの「北朝鮮人権侵害問題」が、拉致発生から四十年以上たった長い時間の中で、置き去りにされつつあるのではないかと感じています。

「めぐみ」には、拉致被害者ご家族や応援者等多くの方々が、ビラ配りをしたり、メディアに出演したりして解決のために活動している様子が描かれていました。しかし一方、ビラを受け取らない人、つまり、拉致問題に無関心な人も多く描かれていました。そればかりか、北朝鮮との友好関係を守るために拉致問題に取り組むべきではないと考える一部の議員がいたことも描かれていました。これらは、少し前のことらしいのですが、私はこの事実を知り、ショックを受けました。「自分の家族が被害に遭ってもこういう対応をするのか。」と腹立たしく思いました。拉致被害者ご家族は、このような対応にとても傷つきました。

しかし、「めぐみ」を見る前の私のように、「拉致問題」と聞くと「またか。」と思ったり、「拉致問題は自分にはどうしようもない。」と、見て見ぬふりをする人が、残念ながらいるようです。二〇〇二年十月に十七名の拉致被害者のうち五名が帰国し、この問題は一気に解決すると思われましたが、その後はほとんど進展していません。国が取り組んでもなかなか解決しない問題です。「国が解決できない問題を、私達国民が解決できるわけがない。」と考えている人も多いのではないでしょうか。では私達には本当に何もできないのでしょうか。

私は、一人一人がもっとこの拉致問題に当事者意識を持ち、現在展開されている活動―ポスター掲示、ブルーリボン活動、講演会活動―等に積極的に参加すれば道は拓けるのではないかと考えます。テレビ番組で、新潟の学生が拉致問題について話し合うという特集をやっていました。若者が拉致問題について考えられる学習会を多く開催し、今現在、拉致問題がどのように進展しているのか、していないのかの情報をもとに、自分達に何ができるか皆で考えることも大切だと思います。

もし家族が被害に遭ったら、皆さんは無関心でいられますか。見て見ぬふりができますか。「北朝鮮人権侵害問題」解決のために私達ができることは、この問題を「私から解決する」という明確な意志を持つことだと考えます。

特別賞

ふるさとの風にのせて

徳島県立富岡東高等学校3年　森本梢楽

「日本人拉致問題」、私はこの問題を過去のことのように考えていた。しかし、「めぐみ」の視聴後、私は自分の理解のあまさを恥ずかしく思った。今も拉致によって悲しみを抱えながら生きている人が沢山いる。そして、何気なく過ごしている日常もあたりまえではなく、とても有難いことなのだと痛感した。

横田めぐみさんは、中学一年生の時、下校途中で拉致された。その時の彼女を想うと胸が痛くなった。見知らぬ国で見知らぬ人に囲まれ、怖くて恐ろしくてたまらなかっただろう。多くの人の人生を奪った拉致という問題について私たちはもっと深く理解しなければならないと感じた。

そこで私は、拉致問題について自分自身で調べてみた。その中の取り組みの一つに、目が止まった。皆さんは、「ふるさとの風」という取り組みをご存知だろうか。二〇〇七年日本政府が北朝鮮当局に拉致されている人たちに向けて開始したラジオ番組のことである。番組では、拉致問題への取り組みや、日本の懐かしい曲、そして拉致被害者の家族、友人からのメッセージを届けている。北朝鮮でどのくらいの人が聞いているのかは分からないが、もし聞いていれば、それはとても大きな力になっているはずだ。「ラジオから日本語が聞こえてきて感動した。」「日本の歌を聞けてよかった。」と思っているだろう。「ふるさとの風」が、拉致被害者と日本をつなぐ架け橋になっていることを願っている。日本の歌は、拉致されている方にとって娯楽であり、希望でもあると思う。いつか故郷に戻ることを願い、日本の曲を口ずさみながら必死に生きているのではないだろうか。私は、拉致被害者の心の支えになっているこの「ふるさとの風」が拉致被害者全員の帰国が果たされるまで、続いてほしい。ラジオを通してではなく、直接「おかえり」と言える日が来ることを心から願う。

私たちは、拉致問題について深く考え、そしてそれを伝えることができる。この作文も「ふるさとの風」と同じように、拉致問題について小さくても何かを変えることができる。このような、多くの人の取り組みが、ふるさとの風にのって今もなお苦しんでいる拉致被害者とその家族、友人の方に届くことを祈っている。私はこれからも、知ること、考えること、伝えることをやめずに拉致問題と向き合っていきたい。ただ事実だけを知るのではなく、それに関わった沢山の人の声や思いを知っていきたい。今はまだ小さいことしかできなくても、突然幸せを奪われた人たちを思い、行動に移すことが大事だと思う。多くの人の行動がより大きな風となり、北朝鮮まで沢山の人が想っているということが伝わればいいなと心から願っている。

特別賞

拉致問題の早期解決に向けて

静岡県 浜松啓陽高等学校1年　西村菜々子

北朝鮮による日本人の拉致問題について、私は、このような問題があることは知っていました。しかし、解決に向けて政府がどのような事をしてきたか、そしてそもそも、なぜ日本人を拉致する必要があったのかについて知る機会も無く、詳しくは分かっていませんでした。

今回、学習をして驚いたことは十七人の中の、帰国した五人以外はすでに死亡もしくは入境をしていないと主張していることについてです。その事実について証明することができていないのに、言い張るのは無理があることだと思いました。そして、帰国をさせない理由も北朝鮮にとって不都合なことを明らかにさせない為という身勝手で人権を無視した行為に憤りを覚えました。また、この問題が重大な人権問題であるという印象に変わり、拉致被害者とその家族だけでなく、日本全体そして国際社会の中でも重要で、早期解決が必要だと思いました。

日本政府はこれまで、北朝鮮との直接対談の他、国連総会などで、世界中の人々に発信し、この問題について向き合い、早急な解決に向けて動いていると知りました。拉致事案が発生しているのは日本だけでなく、タイや韓国など世界中で起きていたことだと知ってその国々との連携が大切で、それが解決への近道だと思いました。

しかし、やっぱり一番大切なことは日本人の全員がこの問題について向き合うことだと思います。誰もが目を背けずに早期解決に向けての思いを忘れずにいることが力になると感じました。

私はこの機会があるまでは詳しく知らなかったことですが、まだ北朝鮮に残された人もいて早急な解決が必要であるということはこれから先も心にとどめておきたいと思いました。そして拉致は人の自由を奪うことで、重要な人権問題であるという認識でいることが必要だと思います。

それが、私がこの問題の解決に貢献できる方法であると思いました。

この作品集は令和元年、政府拉致問題対策本部の主催により実施された
「北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール 2019」応募作品の中から入賞作品を収録したものです。
文中の表現や表記は、原則として応募時の表記に従いました。

北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール 2019　入賞作品集

令和２年１月発行

【発行】政府拉致問題対策本部
〒100-8968　東京都千代田区永田町１-６-１
TEL：03-3581-8898
https://www.rachi.go.jp

北朝鮮による日本人拉致問題啓発アニメ
Animation Film on Abductions of Japanese Citizens by North Korea
めぐみ
Megumi
拉致という、自由を奪う行為を
忘れないでください。
監督：大森英敏　脚本：三井秀樹
企画・制作：政府 拉致問題対策本部
日本語
English
中文
한국어

令和２年１月発行